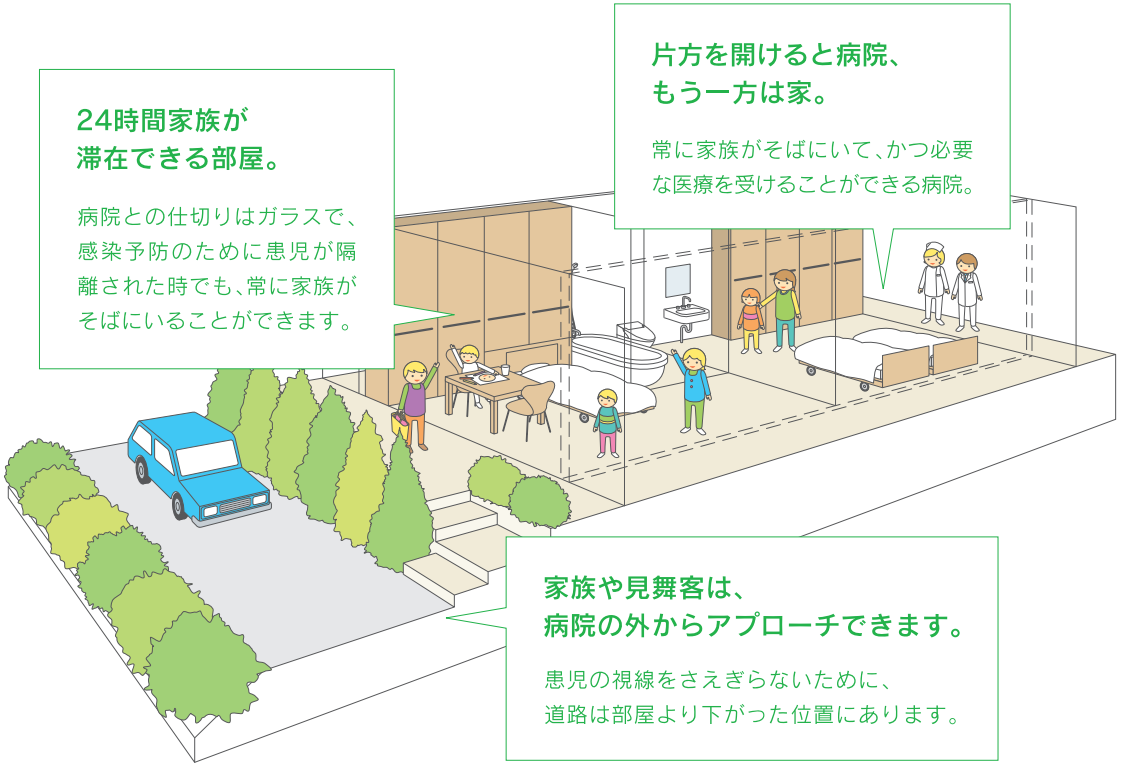
dream hospital is "house"

『夢の病院は家です』

“片方を開けると病院、もう一方は家”



24時間家族が滞在できる部屋。

病院との仕切りはガラスで、感染予防のために患児が隔離された時でも、常に家族がそばにいることができます。

片方を開けると病院、もう一方は家。

常に家族がそばにいて、かつ必要な医療を受けることができる病院。

家族や見舞客は、病院の外からアプローチできます。

患児の視線をさえぎらないために、道路は部屋より下がった位置にあります。

NPO法人「チャイルド・ケモ・ハウス」では、小児がん患児が安心して化学療法（抗がん剤治療）を受けるための専門施設を設立する準備を進めています。まず、30床程度の入院施設を建設し、阪大病院をはじめとする関西の医療機関と連携して、小児がんと診断された患児の化学療法をおこないます。入院経験のある患児や家族の意見を取り入れて、病棟のアメニティを向上させるほか、病棟内での子どもの発達と化学療法中特有の心身の状態をサポートする専門人材の育成に取り組みます。将来的には、ここでの経験をモデルとして、同様の施設が全国にいくつか設立されることで、小児がんになったすべての子どもが、笑顔で家族と共に治療を進めることができるような環境作りを目指したいと考えています。

こどもたちに夢の病院を

病気だからしょうがない、とあきらめなくてもいいと思います。みんなで「夢の病院」をつくりましょう！

チャイルド・ケモ・ハウス理事長
楠木 重範
［大阪大学医学部附属病院　小児科医師］

中学生の時に小児がんになり化学療法を経験。1999年大阪大学医学部小児科に入局。

理想的な小児病棟は家です

家族が帰ってきて玄関を開けるとリビング、奥に寝室の様な病室がある。子どもは入院する前と同じように、家族と生活をしたいのです。

「夢の病院」デザイン担当
手塚 貴晴 + 手塚 由比
［株式会社手塚建築研究所　代表］

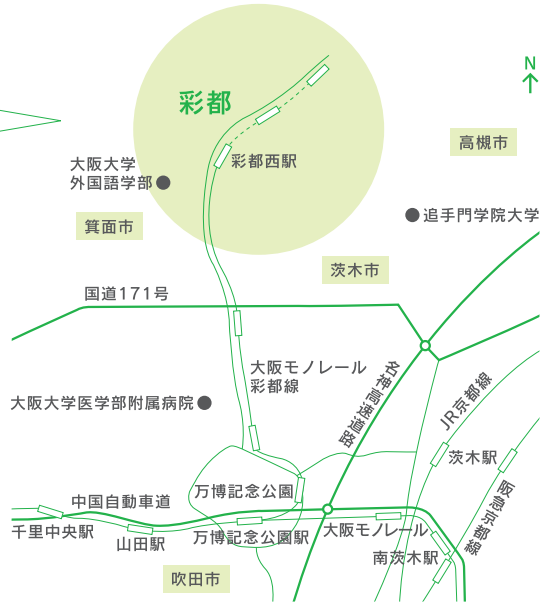
1994年手塚建築研究所設立。経済産業大臣賞／キッズデザイン金賞、アジアデザイン大賞、日本建築学会賞他。

あたりまえだけど、大切なこと

息子ががんになって初めて、家族がそろって暮らす大切さを実感しました。「家」のような病院を1日も早く実現させましょう。

チャイルド・ケモ・ハウス理事
田村 太郎
［ダイバーシティ研究所　代表］

非営利組織のマネジメントや企業の社会責任（CSR）活動の支援が本業。03年に長男が神経芽腫と診断され入院・治療。

建設予定地域

「チャイルド・ケモ・ハウス」は、茨木と箕面にまたがる丘陵地に生まれた国際文化公園都市『彩都』で地域に根ざした建設を目指しています。